

『動物考古学から分かること～上能野貝塚資料の一考察～』

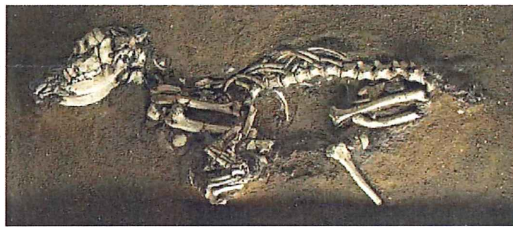
中園 愛 (西之表市)

1 動物考古学とは

- ・動物骨(動物遺存体)を通して過去の人間生活を考える考古学の一分野である。主に遺跡から出土する動物骨を扱う。扱う種類は哺乳類・魚類・爬虫類・鳥類・軟体動物(主に貝類)など、多種多様である。
- ・比較的新しい分野で、かつては環境を示す要素としてのみ扱われていた動物骨を、環境から一歩踏み込んだ、生業・流通・風習・家畜など、人間との関わりを積極的に考察する為の資料として用いる。

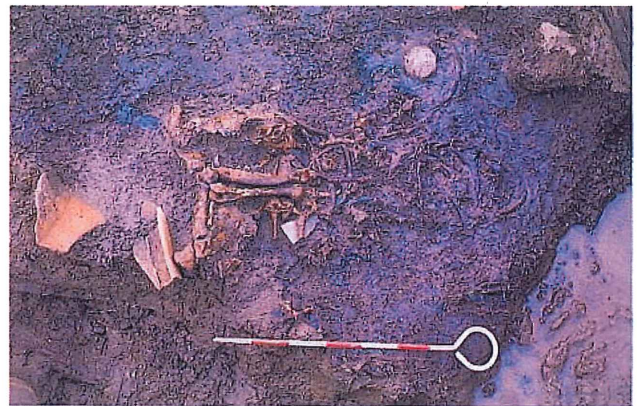
《例》

縄文時代中期の埋葬されたイヌ
(千葉県・加曾利貝塚)



縄文時代では、人間と同じように埋葬されることの多かったイヌも、弥生時代になると食用とする風習が持ち込まれ、骨もバラバラに出土することが多くなり、解体痕なども見られるようになります。

弥生時代中～後期の解体されたイヌ
(長崎県壱岐・原の辻遺跡)



イヌ骨の出土状況(石田高原地区、大溝、弥生中～後期)
50体以上のイヌが出土しており、骨には肉をそいだ痕があり、食用に供されていたことがわかる。

2 動物考古学の方法

- ・遺跡から出土した動物骨は、まず種・部位の同定・出土量の数値化を行う。
- ・・・じつは、部位の同定よりも、種の同定の方が難しい!



←どれも全て上腕骨。ただし、種が違います。同じ部位の骨は、種が違っていても大体同じような形をしているので、部位の同定は比較的簡単。でも、遺跡から出てきた骨を、「シカ」「イノシシ」「イヌ」等と分類するのは、よほど熟練しないと難しいのです。

【答え】A: マングース B: ハクビシン C: ネコ

D: タヌキ E: ノウサギ F: ニホンザル

福田史夫ブログ「故有事」より

⇒種の同定を行うには、骨格標本が不可欠。

※シカ・イノシシ・ウミガメの骨の提供、絶賛募集中!!

- ・次に、動物の骨の観察…年齢（歯や関節部分の癒合具合）、性別、解体痕・加工痕の有無、
割れ方の観察、トゥースマーク（動物の噛み跡）の有無



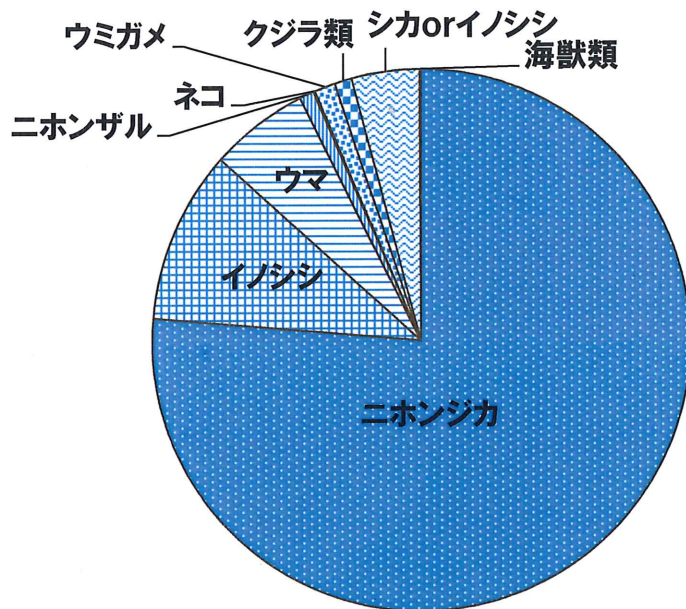
捕獲季節の推定（回遊魚の出土など）、活動空間の広がり（交易の可能性など）、部位組成の分析（狩猟場での解体や分配など）を検討することができる。

3 上能野貝塚出土の動物骨

上能野貝塚は、西之表市住吉上能野の砂丘上に位置する、弥生時代後期から古墳時代の遺跡である。出土した動物骨の種類は、ニホンジカ・イノシシ・ニホンザル・ウミガメ・ウマ・ネコ・クジラ類・魚類である。

昭和 47 年に西之表市教育委員会の依頼を受け、県文化財専門委員の河口貞徳氏らが行った発掘調査で出土した動物骨が、未整理のまま多数保管されていた為、現在整理作業を進めているところである。整理を実施し、分類・同定できた資料は 1,011 点（暫定数値）である。ここでは、主に哺乳類の動物骨について取り扱うこととする。

《出土量の比率》・・・分類できた資料の種ごとに重量を計測。



種別	重量(g)
ニホンジカ	5,461
イノシシ	740
ウマ	425
ニホンザル	63
ネコ	8
ウミガメ	90
クジラ類	75
シカorイノシシ	290
海獣類	5
総重量	7,157

圧倒的に、ニホンジカが多いという特徴があります。ニホンジカとイノシシの2種で9割を占めます。

ネコとウマは、後世の混入であると考えられます。

上能野貝塚 動物骨出土重量比率グラフ

《最少個体数の算出》

最少個体数とは…遺跡から出土する、同一種の同一部分の骨を数えることで、その資料に含まれる最少の個体数を算出する方法。その資料に含まれる割合を概ね示していると言われる。ただし、1点でも出土した場合でも1個体となるため、少ない資料を強調してしまう点で注意が必要。

- ◎上能野の場合（暫定値） イノシシ・・・4個体（右肩甲骨 関節部分より算出）
 ニホンジカ・・・36個体（左脛骨 遠位端より算出）

《整理作業をしながら気づいた点・今後の課題点》

◎骨角器（未成品も含めて）が非常に少ない。

- ・・・骨角器に利用できる部位（中手骨・中足骨）にも、加工の痕跡がほとんどない。
中手骨・中足骨を骨角器に加工する際は、前面の溝を利用して割ることが多いと言われているが、上能野貝塚では、前面と後面に割れていることが多い。脛骨や橈骨等その他の四肢骨でもその傾向が見られる。他の骨と割り方に差が見られないことから、骨角器を意識した割り方をしていないのではないかと。
 - 製品は別の場所で製作・使用され、貝塚に残っていない？
 - あるいは、骨角器を使用していない…鉄器の普及が進んでいた？



【上能野貝塚出土の鉄製釣針（市指定文化財）】

島内で発見された最古の鉄器として、貴重な資料です。縄文時代以降、釣針は鹿角製のものが多く作られます。素材となる鹿角は手に入る環境がある中、鉄製の釣針が作られていたということは、種子島で鉄器が普及していたことを裏付ける、1つの要素になると考えられます。

◎出土部位の偏りが無い。

- ・・・頭からつま先まで、あらゆる部位の骨が出土している。おそらく、上能野貝塚を形成した集団のみで狩りを行い、狩場で解体せずに持ち帰っている。

◎イノシシの大きさについて。

- ・・・島嶼部になると大型生物は小型化する傾向があるが、明治大学樋泉岳二先生によると、上能野貝塚のイノシシは、本土とあまり差がないとのこと。
 - 出土量がある程度ある部位の特定の箇所を計測し、データを蓄積。他遺跡も。
 - 種子島の他遺跡との比較で、種子島全体でそう言えるか検討が必要。本土からの持ち込みが考えられるのか。本土のデータも必要。
 - 逆に小型のイノシシが多いとなれば、南方からの「リュウキュウイノシシ」の持ち込みの可能性が考えられて、面白かったけど…。
 - DNA分析など、科学的な分析方法が有効か。
 - 時代的に、家畜化の問題（イノシシ or ブタ）も考慮すべきか。

◎死亡時期査定・・・シカとイノシシについては、歯の萌出状態から年齢（死亡時期）を査定する方法が確立されている。これを明らかにすることで、狩猟が通年行われていたのか、季節性のものなのかを推定することができる。

また、年齢や可能な範囲で性別が分かれば、狩猟において当時の人々が無作為に獲物を狩っていたのか、オスを狙う・幼獣は獲らない等の選択制をもって狩猟を行っていたのかが推定できる。

4 まとめ

上能野貝塚出土の動物骨については、今は同定が終了し、現在数値化を進めているところである。資料の解釈は今から進めていく部分であり、発表する内容としては不十分であったことをお詫び申し上げたい。しかし、今回発表の機会をいただき、数値化の先にすべきことをまとめることができた。

種子島では、動物骨の出土は多いとは言えないが、動物骨から当時の人々の行動パターンや生活の様子を読み解くことができる可能性を、感じていただければ幸いである。

【参考文献】

- 河口貞徳 (1973) 「上能野貝塚発掘概報」『鹿兒島考古』7 p 59-68 鹿兒島考古学会
 松元光春・西中川駿・長野慶一郎・河口貞徳 (1982) 「古代遺跡出土の動物骨に関する研究 III 鹿兒島県上能野貝塚出土骨の概要」『鹿兒島考古』16 p 99-114 鹿兒島考古学会
 金子浩昌・忍沢成視 (1986) 『骨角器の研究 縄文編 I 考古民俗叢書〈22〉』慶友社
 西本豊弘 (1991) 「動物考古学の現状と課題」『国立歴史民俗博物館研究報告 動物考古学の基礎的研究』29 p 3-11 国立歴史民俗博物館編
 樋泉岳二 (1992) 「貝塚出土の貝・骨が語るもの」『季刊考古学』41 p 22-26 雄山閣出版
 Sebastian PAYNE 著 鷗沢和宏 他 訳 (1993) 「動物考古学入門」『ラーフィダーン』第XIV巻 遺物調査技術研究所 松井章編 (2006) 『動物考古学の手引き』独立行政法人 文化財研究所 奈良文化財研究所 埋蔵文化財センター
 沖田純一郎編 (2019) 『西之表市埋蔵文化財発掘調査概報 内城址・上能野貝塚』西之表市教育委員会
 西本豊弘・新美倫子 (2010) 『事典 人と動物の考古学』吉川弘文館

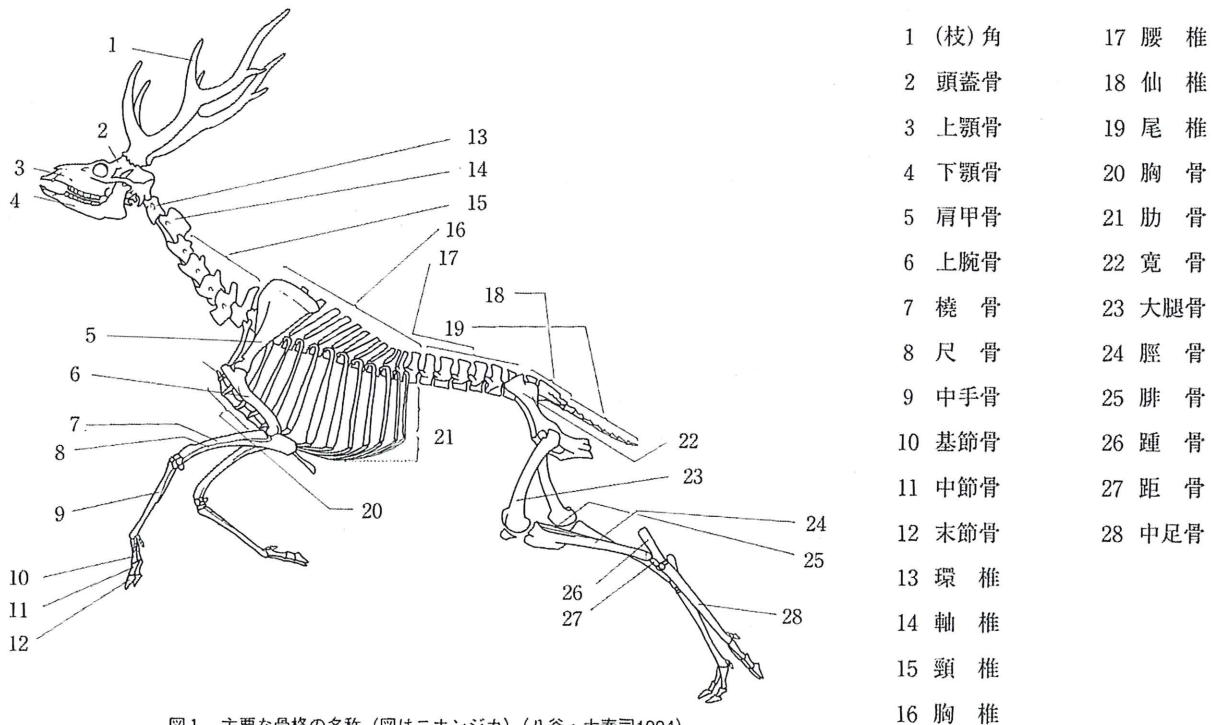


図1 主要な骨格の名称 (図はニホンジカ) (八谷・大森司1994)